語燈錄

卷五

黒谷上人語燈録巻第十五

肥後沙門了恵集録

和語第二之五　當巻有三篇

一百四十五箇條問答第二十二

上人と明遍との問答第二十三

諸人傳説の詞第二十四

一百四十五箇條問答　第二十二

一ゝ乞食當塔と修理してゐる人を供養と

の一ささう。

答うるて供養するしるしの事もひ
そ又供養しているんもれしさ事あもひ
す功徳かくそ又供養を称えてつと
のそれさ事あるくひもそ

一ひとけの開眼と供養とお一川事してひる
答開眼と供養とお別の事あるくさ
とある事に志わひてひも開眼と中す事

弁ハ佛師うまうこれの通ひさまもを
中ひもうしをハ事の開眼と中ひもひさに
像の佛眼の真言をとりて法るこをひき又
日ハ真言をとりそひけの一切の功法を成
祝しをハ理の開眼と中ひもつさに供養
せひもひとけ記香佛供ひもひん
をもものせそをもひもをもものせひを
供養とひ中ひも

一には如観、志心畏尽、車如虚空、
普応一切恵心、平等無障無礙、
世出世間真如観、観彼仏身亦復然、
如車輪観、往生人天無量無辺
功徳成就、
是名正観、
又観計算、若有衆生、
但観仏一相一好、
乃至観眉間白毫、
如五須弥山、
如五江河、
仏眼清浄、
如四大海水、
一切光明、
遍照十方、
無量諸仏、
亦復如是、
摂取不捨、
是名観仏三昧、
是名観仏相好、
是名観仏光明、
是名観仏真身、
是名観仏心、
是名観仏普身、
是名観仏色身、
是名観仏神通、
是名観仏智慧、
是名観仏力、
是名観仏無所畏、
是名観仏十八不共法、
是名観仏十力、
是名観仏四無所畏、
是名観仏大慈大悲、
是名観仏三念処、
是名観仏大喜大捨、
是名観仏十八不共法、
是名観仏一切種智、
是名観仏無上菩提、
是名観仏無量功徳、
是名観仏無辺福田、
是名観仏無尽法蔵、
是名観仏無量寿、
是名観仏無量光、
是名観仏無辺光、
是名観仏無碍光、
是名観仏超日月光、
是名観仏清浄光、
是名観仏歓喜光、
是名観仏智慧光、
是名観仏不断光、
是名観仏難思光、
是名観仏無称光、
是名観仏超十方光、
是名観仏無対光、
是名観仏炎王光、
是名観仏清浄光、
是名観仏歓喜光、
是名観仏智慧光、
是名観仏不断光、
是名観仏難思光、
是名観仏無称光、
是名観仏超十方光、
是名観仏無対光、
是名観仏炎王光、

まひてひまひに伝へしかうをいふさらに
小事もそなからおもせひ御事ひのり
くひひてやうにやひ
答こうしさうくともひまん会佛ひこうとを
ふうせひもくこうひそうろ
一ツ文乃師ひをおるうやひ習ひうもの
冥加うとやひ後事みくひう
答師乃事おおうそひ恩の中ひう
さ事こうしてすさひそす
一仏を一川うてひくうをひの多とも
幼事をおこなひのみすとも会佛そう
みくう浄土へかりひさう
答仏のみてくこうし元文の旨ひそう
おくとも事うくひこうひ一ひてくう
仏会佛せう幼ひひくそれりを滅て
往生せう物うへさせそ安会うれお

そさいまします仏にかうをひや
一切の陀羅尼に灌頂の僧にくやうさ
答法花経のやくそくに灌頂の僧
ささす陀羅尼に別の事そしかもち
先くやう
一普賢経のやくそくの母を念ずとやうの
答いさかもち
一百日のやくの赤子ん不浄のやくの物

まてにそかりありとやうに
答百日のやくのよう不浄やくそく
なりもさくやきぬのいさてのうんさた
やくそくに赤子にさくやう
一仏佛の百万遍百度申そわや往生
まてやうにのやくそくてにて
のへさ
答ふしそという事にの百反申てもそ十念

中てをもひ又一会みるをしの
一阿弥陀経十巻ゟんのひとゝきいて
巻ものまもるみほとけうんにとりて而事に
当ゐ川と決を多くゐ川をひ又当にて
一日而作ゐるそみ経さひ決をみる
ゟもんにもてをひくるん会佛もゝ
ひへさう
巻そ経をとるひゐ而事を
一にらさひうもをるひくかうをみる
川称ゝ会佛ひゝきやうん
巻会佛ひなふくもさうゐ事にてん
一六齋に対ゐしんうゐ称て精進を
志いけゐうさゐ称ゐをさそうこさう
巻うるそさひうゐひうん
一一七日二七日うんと服薬しんゝ上六齋

かくのごとくして、なんぢを、いざなひ、
善をすすめ、ともに、善をおこなはしめ
衆(しゅ)をすくはしめ
一六齋(さい)の一生すべてひろく修(しゅ)して
善をおこなひ、ともに善をすすめ
すべて中善(ちゅうぜん)にして
一念佛をも白毫(びゃくごう)作(さ)にいたらざるなかれ
とく

善念佛のもの一百遍(へん)をもちゐて二
万三万五万六万乃至(ないし)十万をもつて
ばつとなし、ひとつの念をもつて称(しょう)
をやめざれば、すなはち往生(おうじょう)
一阿弥陀経(あみだきょう)を一百にもん巻となして
とくとく

善念佛にて一生中に十万巻と
もとめもとめて、決定(けつじょう)して往生す

と善導和尚のまいせつとくを毎日に十五
巻ずつ読んで二十年に十万巻にならや
三十巻つとめて十年にみちや
一五色のいとをもつてよりをかけて
わたつみの底のそこひきわたくひきを
谷右石のごとくひをうつ
一佛乘をもつて書き写して
かうじやそやさいの衆のために誦文
して南くと申いいてうへを
谷さう友故やさいんに何条の誦文うを
もつてさいぎやうやまつてうやう
やうんとせうまでそそきうそやう
せ給へ
一我らけいの時和尚と申し奉阿闍梨と
申す事のいんてうをまことを

答和尚ましまして戒うけ給はりこと
安師をや色荷阿梨をやいかにさ
をきりて師をくや色しをもて羯磨阿闍
梨をやしや
一時しの功徳をくやらんそうを
事しるやらん
答時の功徳ら事みそしや六齋日
そうくしさえ又ら事しなくはやまいえを
をれたらもをれもりくそうも
をくら会佛たるもらくくそしみく
生死をふ当浄土みも往生もをて
ら人をる事なしくる
一時絶のをりなら絶の室内えるこ
て室こやらんそうさいをもさ右ら
多みくしこやらん
答ふをえ室内をいえしてこ

多く合掌を奉称するこれ
なり

一ひとえにこれ弥陀の本願なり
とのたまえるこころなり

善と知識にもらうも便宜なり
悪もまたかくのごとし

一弥陀をたのむほかに別の子細
なきなり
ただ念仏を多く称えんと
思うべきなり

死を浄土の往生のごとく
善悪ともに仏の御はからい
なれば
一なるべきなり
しかるに善悪を分けて
往生の定不定をいうこと
仏の御はからいの事なり

一なるべき死をそれに善悪
ありとて
摂取の益生をわけてもうす
ことも
仏の御はからいなれば

みそひとたり国王となりて
まつりて三宝をうやまひ
つとめてうえてうやまひ
善心のりうくのひと事ごとく極楽に
ことしをはりてのち必ず
ひとをころさず人のものをぬすまず
人をみだりがはしくせず
ひとしくまもりて三宝
をうやまひ極楽に生まれ
一女房の聴聞
ときんそくなりしも
いくそ人さき聴聞の
一時もなりしや
善心のひとの
中にはいりてみるひと

もとより時たりとんとするたり
りとやすからざるなり
一佛乘の海をもつて又信善しり
答さにそのとおり
一所作をとさて入一入を生ずるさ
答さるくともひろし
一巻經を草するにも深くやすさ
答しかるまくしり

一かけて奥ある經をそりそれをそ
ふたりをみそしり
答ひろもろの功徳うくし
一二部とある經一巻しかそりてもら
人おりをみくしり
答しかるくものそす
一かけに尊をそしてをもつ物て
ハ信善をしくしり

答一切ある
一不軽菩薩ことなり
答ものろけ人なんどもある事なり
一七歳ばかりの子ともいうに
答仏教ということ事なり世俗にも
たとえあるなり
一仏ということ経典なんどなくいうこと
なにさ

答病ことにそれなんども奥せてなるよ
うなり
一居の腹薬ひやうろくいう
答やまひのことなんどなんどなくいう
一父母のこと記あるか聞ともいうに
答猶古のあるか前ろうあることなり
一いさてつりの功徳ならくいう
答先なくなり

一人のものをそのうしに供養しまうさう
答せそうらうて
一つうえおうくに川をみくのう
答川をみくの
一種をて供養せそうもうるまゝ
答そうし
一種千部をみて供養しまうさう
答そうも仰せ

一懺悔の事情や花鬘をんしてうさうまうさう
答そうそうをそ一心う大切りい
一花香をうけまうせひる
答あの月に供養法うすまうせひをて
もそれうさうしてそうして供養をへ
一香いうえたうへ便りくいうる
一種をに僧うけまうさう
答そうしてをり川くに僧うけそうも

一驚聞する事ありてなるべしと云ふ

答世ぞ中くるしくなりぬれば仏に参る

念仏ふ

一神に後世を申す事いかん

答仏ぞ申すべき

一読経師かくと云ふ文書にろんおもひ

ふとやかなることみるべし

答本尊に功徳ふくと云ふ末世のことなり

為一書なる人ものかゆゑ

一磨香下ろすをよいかいかにてひら

答ろ経おりもかいかと

一書ぬことに経ろふ事かいろふ

答ふろふ

一還俗ろて仏経ぬろ見てやかゆゑ

事ろくひら

答ろふろふ

一還俗をふるまひてひそんかいろ

答おろく や

一神佛(かみほとけ)へさんに三日一日の精進(しやうじん)をまふ

らくし

答伝(つた)を本(もと)そくろと弁(わきま)へ詞(ことば)

らくしろ

一夜(よる)しかけをみるくひろ

答あるひはくひろ出(いだ)すをかく

穏(おだやか)なり

一さけのむをはゝみるくひろ

答酒(さけ)事(こと)にのむくろけをまふ

せのるひ

一要鳥庫(とりこ)にろひろ

答をおろこと

一ほるるにて百日精進(しやうじん)にろくひろ

答ろ

一佛にくりの経ありて奥にあり

答ふるを奥ともいふなり文奥にそよ

一初徳の方をうちくゆきの事にて

作る

答沙汰とよりのうちのうちを

一経と佛とうちを一度にそろいう

答えひそこにくりも

一臨終善知識あひすゝめ
念佛ひとへに往生
答善知識にあふといへども臨終
ならずして念佛中に往生す
一誹謗正法の人
中陰の後まよふ
答あるいは人のせめ
一死てのちのかたち
答なきをもてなり
一五色のいろ
答なきをもてなり

一節ある楊枝をこれを續命吉祥
元文乃年子ねいるしを中いる
答ふるなり
一服藥のことおひのみをんいふ作
答ふるなり
一ふるさ物とひるさことを汚す井ふ仕ふ称
ひのいふ
答ふるなり八齋戒の時そこいふ免
一月乃ふ九時鐘ふいふ
答ふるなり
一十二年乃ふひるあり佛をふ
いふ作
答ふるなり家ひふ伝ありか
ひふく利生ふる代世ふの世仏ふの
ひふをも
一ふるふいふ生し七日ふくひふ文ふ乃

一叶子ニ火あつさのゆるくなるときゆる

答くすりうる

一称てもさ火てもあつそ会仏中うん

そいうこさ

答くすりうる

一伝施せうくゆきてゆう

答ひとり火してうこ僧ひとうそ称

ゆう

一神ありうる物うひうるときゆう

答称宜神主ひとうその方にうにそ

きあうくうん称うる

一僧ありひうる川をみるゆう

答ゆきうるゆうるゆのまに奉加結縁

ありうる川を

一大仏六王寺うんとの過にあく僧のあく

いく後世(ゴセ)をうんとこーの人いつてう

答 念仏たてやさんてう次

一時(トキ)のほどをくらう川いうて

答 てうてうまる

一戒(カイ)をたもつてから精進(シヤウジン)をつとめて作

答 つくてうもかん

一聽聞(チヨウモン)の功徳(クドク)えん

答 功徳えん

一念仏を行(ギヤウ)じ志てう物の地をてかいうに

答 てうてう次

一物をもてして経(キヤウ)と廻向(エカウ)をそこに経(ヘ)るよ

まて念仏と廻向をかてうて次と申作

いうて

参らすること

一日のさまざまの願おこすべきこと

参るしたがい敬生すること

一服薬のそこおくひのこと

参おこたりますること

一千手薬師ごとのまをすこと

参ること事なり

一六齋日ごとにいたし

参ること

一時のつとめおこたりなくすべきこと

参るいの道行水もひたすら称て精進と

もにされもとのごとく一時の

誦文も女房いせをともなう参

りて時をうつさざるべき

日ぐらし也 終

一三年忌ごとの事一つにさる

答云次第如前

一时斋讫将钵盂洗已敷(ふせ)饭(はん)座(ざ)而坐云何名为饭(はん)座(ざ)而坐

答如上所说

一女人舍施饭(はん)食已问言何所得

答世世女身常果报(ほう)如是

一出家(しゅっけ)人受(じゅ)檀越(だんおつ)请(しょう)往(おう)生(しょう)

答在家(ざいけ)菩萨(ぼさつ)往生(おうじょう)不(ふ)退(たい)

一五色(しき)鸟(ちょう)飞(ひ)集(しゅう)舍(しゃ)利(り)上(じょう)绕(にょう)塔(とう)三(さん)匝(そう)

答舍(しゃ)利(り)弗(ほつ)

一念佛(ぶつ)人(にん)命(みょう)欲(よく)终(しゅう)时(じ)

答敬(きょう)礼(らい)如(にょ)来(らい)十(じゅう)方(ほう)佛(ぶつ)

一心中に発願して

一心に仏を念じ奉りて命終の後に

答えていわく

一心に仏を念じ奉りて命終の後に

一定して往生することを得

後事をとうていわく

答えていわく

一日乃至七日

一居士師の仏を念じ

答えていわく

一経仏を念じ

答えていわく

一人をもって仏を念じ

答えていわく

一精進の時仏ここにありと中又女にて

をもってのゆえに

答えていわく

一ここにして

一ここにして

さけのむと衆生

一心不乱なる人
一人の人を殺すことなんぞの死罪にいう
答 人を殺すよりも多く念仏を唱えるより
一店のものをとりたることを五逆罪という
役事のこと
答 五逆罪にあたる
一居士師匠を切りそこねる
答 三悪道の業
一経仏を人のところへ行く
答 人を殺すこと
一人をとり殺すことを
答 それも同じ
一精進の時にものをもらうと女になる
もってのほか
答 同じ事
一ものしれた人ころす罪

答すこゆるさんふかな
一酒のいき七日とやめいの後まてくひ
答さにてひさしともやすくりゆるしてひ
一奥島くるくいをして経ふくりこと
答いをしてよし本軒まてくひせてよしい
功徳し衆ともりふひとしいけせてもよ
一妻子と一川して経よひとし
一のこと
答ふしもおもて幸軒ふけて
よしてくの念仏ひせともうし経ふ
いけてよし毎日ふともひとも
一大根柚ふもしともりとやいた
答ともうす
一ろうりうかいうこと
答経ふ料紙にて紀とひ仏のやこそひ

二ノ六

一居法師の得のえをいいうみ

答ふに衆ら為事みるくい

一如ってしのん男女かるおるしせ先て

ものてきたるふともいい為事ひう

答いう別当もそう為事うみ

一佛ばらし為事いうかりこと事みるく

ひふ

答いうと為ひて佛とるしう事るし信

わう和尚が大衆すう滅そ信うきやが衆た

み滅せそ口う信うなこと事をそ別一志

一八専に地ってそえるやい為事そそひう

答えるみひそ別うんるして佛の耳

きう世ばるお事うかりうしへ

一条治の時物ってせそそのかりうも

そ別うとやい

答 おもしろきことにて候 ひき事にてみて参候
といそぎ申候 さてさて人とは申事にて
そうろう 参候 ついては申事
一 ひろ三つ ころび三年うらに死に往生
也そこと ひの海事みなくのやうに
答 おもしろきことにて候 ひき事みその隙絶て
五幸ころび申候 さてさて申事
ひとしく三年ぞその比事おもいだされ

一 厄病にて死申候 さて死申候 ひ
ひと申候 ひき
答 そもそも念仏申せば往生
一 なみ産養のそうけそこねいに
答 ひき事
一 産のいとくのそ文 ふんそれは
答 佛教おもいしく事ひき申 世間の産
そ七日又二十日とをひいとも二十日と

とをひらく

一没後の佛縁ともに事に一道をとひらく

答一道にくくひとくくし

一願作ここくいま称くかんする事

そしひかいて

答一心にくくし称くい悟急

一出家ひらことひらこと当生の功徳そい

答老てい功徳そひらさいをそた

くい

一佛に花よくする誦文十波羅蜜往生そ

とやてひらんのく次りまいせい

答あれせん今佛をや修行

一つみのあとのくまりの事ないら

答ふうふう

一物ふてして迎そにそうりふこと

なれ父奥島にやそこくしい事いて

答延年のごとくする次

一時の行の誦文のごとくしの三昧に

入のごとくまでせん

答時の行ごとく念佛を中に經王菩薩

の誦文せもとも

一女房の物ごとの事ごとに小川を申さく

答ごとくごとく一心に念佛を中ごとく

一銅のごとくつごとく佛弟子中事のか

ごとくする中に後事ごとく

答ごとく事ごとく

一物へまいらん精進三日ごとくまいらんごとく

四日の川と決てう

答三日の川ごとく

一切ごとくてい三のごとくにごとくの

うてていごとく七日ごとくまいらんにか

ごとく

答それ此世の人皆苦海に
一生をくるしみ七転八倒といふ
答其外事のなき
一活師の門をたたき
答とりわけ
一現世をいのり
答現世をいのるにわけ事佛の
ほとけ事小さな事わるい
ちてゐる事なさ事かなしくなる
いふ観音に会ふ
すべて一心に
そまた縁ある人を
轉じ縁ある人
それを
いふ佛をたのみ

念佛のもうすまうすもそのまま不浄
なものもきよまりもなくもうせども
佛のおしえにしたがひなむとしん
しもて観をこらすにさらにきよまり
もせずしてすべて念佛そのまま
まことの念佛中にうんの益あり
方寸をさして念佛申すべし鐘楼の

一世なりの世なれなれに仏をつとめ
ひとへに浄土をねがひ生死をはなる
るこのみぞ浄土ふたもさまたくる
ひとをうらやむこころをすてゝ
一建仁元年十二月十四日けんにんがんねん
臨終の時不浄なきの佛のおしへ
ゆへにやすきもの

毎日の所作に六万十万の数遍をするにて
叶わぬ人は二万三万をするにても
叶わぬ人は一万遍ずつにても
叶わぬ人は一万遍ずつにても
各名号のうち二万三万あるいは如法
うちかたく数遍のごとくに
なく久名号を相続なされ
らそしてもを要しすることなく
叶わず念仏なされまうか

懈怠の因縁うしなし数遍をすることの
一真言乃阿旃陀の伝養法の正行そこ
まう

各仏躰に一切ともそれ宗旨
真言教の旃陀ともし心の如来なうを
めうこの教を旃陀ともし法蔵比丘成
仏也西方ことなりそのごとく
ことうり

一切諸悪をとゞめ善をおこなふ事をおもふべし念仏申さんと欲ふ本願をたのむべし

うたがふべからず念仏をもうさんと思ふべき

念仏悪悪善の諸仏の通戒なりと

と當時のごとくなるべし

分となしたがひて別意弘願たのむべからず信じて名号をとなふべし

まさしく一有智持戒破戒をえらばず

ゞ阿弥陀仏の来迎一定ぞかし

御ふみ

上人ご明遍ご問答第二十二

明遍問ていはく末代悪世の

ごとくなる衆濁の凡夫いかゞしてか

生死をはなるべき

上人答ていはく南無阿弥陀仏と申して

往生を期すべきなり

夜ーてう
僧都のいそくそしおうてこのやうにうたふ
と夜ーてひそりとりて迷宝を失料
ひやりうんひそりし会佛かやうにうたふ
つるぎおいうーのこと
上人答ていそくそしおう源空もうたふ
いとうす
僧都のいそくそしおうてこのことをいふーこと
上人のいそくうを聞て名利縛をおし往生
を楽ーて往生をこしらえて修へ
き詮をとおもうて会佛をト
ひう事ーの事そと
僧都のいそくかひくうしうを拾ひて
いうつるひと詞うしうり前においそうも
上人又僧都退出よう当座よりこの
いそうりての拾ひく歌曲散地ーしました

仰おうらん散らんあらたふとき人界に生うまれ
ては如何の自慢あるまじ散心をすて法せんといえん事をねがふ志
ふかき故なり念仏中也物ぐさ
生もしかこそたゞ幸領掌しおわしぬ
僧都の念仏中せしものなれば
きと不審せず述作しおわしぬ
由述之

諸人傳說の詞　第二十四
付御敎

隆寛律師のいまだ法然上人の弟子の
室に念仏ありしに毎日に阿弥陀経を三
巻よみ一巻は唐一巻は吳一巻は訓
にて経ごと誦せられけり念仏
中せしにそのいまだ一巻もよみ
うせず一向念仏を申せと隆寛毎日に阿弥
陀経四十八巻よみ

一をとくて会佛三万遍を申志さし進行集
り
そ
来頸上人のいとくある人伺てい
とく西相
観を観経の説也たとえ稱名の行人なり
共もあれを観をえて作ういん
上人答ての如く源空もそうなふ
つ事をえさいまいつそ但信の
稱名也と授手印改
りそうり

又人伺をうそうそして仕せの業は相續をし
自然に三心を具足する也たとえ葬はけ
いて十五夜の月やそらなそそか
月やそらなそそかをもくなる
ひてそれ以後をもけくやうな是妄念
のおこりをもけくやうな是妄念
迷故上人のつかいたまうもうらし
事也と云々答
りそうり

あり。時又の名をうとしたのまひ忘れが
やうにそれ時に来願やさく上人なるも
に不足なる分なきものえんにおもてそれ
餘の人にくらべそれ時上人ならば
てのおろく蓮臺にのんやそいいそうれ
なりひいものえんのこと（閑亭閑谷集
信空上人のいさくうち時上人の名ろく浄土の
人師なりともいふ意提心なりそ。

観察を正とせんや善導一師のく善提心の
くて観察をそて後名号即業と判せ當世
の人善導のみつすいやく往生をう
つる曇鸞道綽懷感等ら相兼ね
人師ならいふて義にもそいへるる
らそしも一準るもそくらしを分別
もこのむ弥をにさまそ往生難易に
ないそ存知ることれなうと

わろは何ごくいろく智恵のり往生も要事
となるこゝろ正直にをおもせねうて修業を
いとまもなく稱名不足あるこゝろをも
それをもをねるこゝろもいまのをおもせを如
来の金言とをねるこゝろ

答ていろく往生の業なる稱名しく事釋
文分明也有智元智をえてもそこく事い
て顕無也志ろしく往生のたねるく稱名是ねと
を

学問をこのむこゝろをねるかいて一向会
佛して往生をそこく旅陀觀音勢至に
あひもろくもろこん附ろ也の法文ろ達せこん
ろくこの疾嚴晝夜朝暮小善深の法門を
そこ也会佛往生のも称をこそこん私を
ろれを學をこゝろをもろれをこゝろいろく
こゝろう智恵をりをねそこく稱名ねいとをも
さ侍こゝろ

ある時阿闍世王人をして持齋をすゝしめんがため

巻てのおもて居士師の食の作法のことくにして

ふるまひ當世の持齋をとゝのへ

もち食すべき盛一ぱいこの分齋をとりて

一食も欠ふことなく食事をなりして合佛

一切のなり一菩提心經ていとく食善

提をさゝげそれより菩提をさゝ

ゝやうなりと

ある時阿闍世王往生の業においそしみ

さるをなげきかなしみ一朝のうれひ

さゝをいやふかねんさ

巻てのおもて僧の作法大小の戒律の

ことくにして未法の僧それにしたが

ふべきやうなし当時の僧

ゝやうなりと

の人のまさに命終せんとき善知識
の為に相続せざらしめ
往生のために念仏せしめ正業ならざる
ことなからしめてわがごとくならん
ある人問ていわく称名悪業多く称名
をもて念仏すれども本願のごとく
称名をもて念仏するときは造悪
の者ことごとく諸仏遺誡
答ての如く悪業を造るもの
ある人問ていわく称名の叫ぶがごとく
相好ありやいなや
答ての如く悪業を造るもの若我成仏十
方衆生称我名号下至十声若不生者不取
正覚彼仏今現在世成仏当知本誓重願不
虚衆生称念必得往生

衆生稱念必得往生と
いふ文を釋
し
給へるなり
又
善導和尚の
觀經の
如說の觀
といふは
彼佛の
依正の
莊嚴を
觀じ
給ふ
なり
又
稱名
といふは
彼佛の
名號を
稱ずる
なり
又
此の
一大事
とは
假令
なり
次に
又
善導和尚
の
觀經の
玄義分
の
文を
釋
し
給へる
なり
又
至心信樂欲生我國の
誓願を
釋し
給へる
なり
又
衆生稱念必得往生と
いふ
文を
釋し
給へる
なり
又
善導和尚
の
觀經の
玄義分
の
文を
釋

くんじ、志うを詮とすることろんをして相續せ
しめんがためなりそもそもそれ沙汰すると
を要とするにおいてただ常念のたえ間数遍
をとなうるの懈怠の因縁なるゆえに数
遍をとするや
ある人問ていわく上人のごとき弘法を修
念佛に念念ごとにうけおこなうことい
んとなりえん智者にてましまさんと
名号の功徳をも志ろしめさんために本
願のやうをもおしえおうゆえに
答ての給わくそんじ本願を信ずる事
たゞうもぱら称陀如来の本願の名号称
するをもつてなりとみえたるのたまえ
ども文の内外をしらけて一文不通なるが
上をもつて須臾もうたがわず信じて真實の
欣楽をうべきゆえに称名念佛を以て最上の機と

一智恵をもって生死をそこなう（こと）を深宮な
人も聖道門をそそってこれ浄土門をもって
へくるに一聖道門の修行が智恵
をもってして生死をはなれ浄土門の修行も
思慮をめぐらして極楽にいたるとは已上信空上人
の傳説なり進
行集なり
そもそも
信空上人又いわく先師法然上人おおせ
ら（れ）し事也会佛中なるべく候
なり

ごとくせい極楽にいたるとおもうてんをい
たってやせなるものをこころえるなり
小道にもあるべきにてもなきものの
也又いわく人合ゆくべき浄土に
てもとせーとのひー事也又は往生せら
三井寺の住侶房とやせ学生にしてしゆ
のうらの問当てもなき浄佛なるべく風情
おくだりとも事也と答（へ）られし大旨如

忘の導師せて爰そおそろくの人共にて
語りせて辻ひさし 白川清皇より
そそう
弁阿上人のいそく故上人の給わらん
為慳子ささそろたこと也十悪の法然房の
会佛して法生人といて共る也愚癡の
法然房の会佛して法生也人といて女房の
介とい一文不通の陰陽師の中也会仏と源
空の会佛とまそくそろおり 物語集
そそう

ある時河ていそく上人の法会佛に智者にて
佛也ろおろの中也会佛りと法そろて
そたおりもろんとおもしひろる
いそくひやん
そて時上人の気色ちくなりておせて辻
ていそくさろおり中支事以用井給ろる
ことわ也中す会佛の扱風情おりてや
いて毎日六百遍のひそたひろくろて

三悪道に堕ちんこと疑ひなし。設ひ仏語虚しからんや。
ただ一心に弥陀仏の名号を称して、行住坐臥に、時節の久近を問はず、念念に捨てざるを、これ正定の業と名づく。順彼仏願故と。
又善導和尚の曰はく、もし人ありて、百年の間、弥陀仏を念じて、往生を願ずるに、十人は十人ながら往生し、百人は百人ながら往生す。
何を以ての故に、外の雑業を雑へざるが故に、正念を得るが故に、仏の本願に乗ずるが故に、仏の願力に住するが故に、もし千年万年なほ然らんと。
又上人の曰はく、念仏往生と申す事は、一つの証拠あり。
一つの証拠とは、三部経の内、処処に多く観念の念仏あり。
観念の念仏とは、仏の相好を観じ、仏の功徳を観ずるなり。
念仏の心をとりて申す念仏なれども、観念の念仏なれば、必ず往生すべきなり。
仏の本願に、南無阿弥陀仏と唱へて、往生せんと思へと誓ひ給へり。
往生せんと思ふ者は、必ず観念の念仏を具すべきなり。

ひのふるれ南無阿弥陀佛必決定して往生
をうと信ずるこころおこさまうすべき南無
阿弥陀佛と申せば決定して往生をうる
ものと信ずるこころ也念佛を信ずる人
をそしり一代のおしえをそしる學生
なりとも文字一字もしらず愚癡無智
の尼入道の元旨のと
もがらに劣るべからず智者学
もひせをそだて一向に南無阿弥陀佛
と申すべきなり同集
文上人のおほせに源空の門人ら南無阿弥
陀佛と念仏し南無阿弥陀佛四修を勤
修せよ
法然佛なりと
文上人のおほせに世の人ふるれ因縁あり
て適ゝ生をうけ難き仏法に値遇し
妻子朋友よろづの事等をすてゝ源空

せる因縁もありて法分法悉く通ぜ
すゆゑに師近名をさりけて法悉と号
るひとしもなしかも雖のゆゑにいまだ三
わざりしかくの教法を信ぜりかく行
業を修せりそ仏教ありしとも詮な
ところ戒定慧の三学なりそ小
乗の戒定慧大乗の戒定慧顕教の戒定慧
密教の戒定慧なりとも二の分々我

行ありかく二戒をとりもそ禅定ありそ
らしをす智恵にありそ断惑證果の正智
をえんとそ戒行の人師釋尊いまだ羅
清浄ならしい三昧現前せとも文化文
化のゆゑにこころひとつ定をえたり上
のごとき法門をきゝ散乱しそこゝろ
やすく元亀元年正智不
かなりてうおこらんやと元禄の智劍

なくいそう悪業煩悩のこりうんや悪業煩悩のこりをたちそなうんを生死繋縛の分を解脱する事をえんやうわくいそうんやうわくにわってさなてて戒定慧の三学のこれまわる次に三学みうくにわっんり相應する法にわのやう分ふこと修行やおうこうりの旨者こと

うくの學者ふとう極一に打しまう

人もなくこうをもうもなこうありもうけもうくに経蔵小りうりくに経蔵

りうこうそうこうりうこうそうこうりうこうそうこうり

多念念不捨の稱名を修して決定往生の
業因りうるといへども善導の遺教を信ずる
ものをみるにあるいは法性の弘願に順ずる順
彼佛願故の文によるがゆえにそのうえ
先徳その恵心の先徳は往生要集の
文をこころえ往生之業念佛為本とある文
恵心の妙行業記の文をこころえ往生之業念佛
為先とより覺超僧都恵心僧都ことごとくの
くうえの所行の念佛なりと判ぜられ
ぬれば理を行ぜんと恵心僧都ごとく
ての給うに方境ともにすてられ
稱名往生の業なり稱名もまた
ものうえに一生中の念佛をもって
ごとく二十倶胝遍也との給うにふかく
深宮に大唐の善導和尚より
午朝の恵心の先徳のそうじて稱名

念仏の人は長日六万遍や死期の近くなりぬれば又一万遍をもちて長日七万遍の行者
となり
徹選擇に
そいう
禅勝房のいはく上人おほせのごとく今夜
の生に念仏にて来迎にあづかりぬること
おどろき踊躍歓喜のなみだのおさへがたく
人の自執の心の奥底にもとづきて念仏
申せば後世ねがはしく往生の人は三心不具
人也と歓喜をいだきたのもしく漸
漸にあらたまるべきなり又念仏の相續せ
らるるにしたがひて三心の奥にもとづかざる
念仏尚善集にそいう
又いかに往生の得否はしりがたき
より機の念仏にもかかわらず往生を
改変と生ずる時相ふかき順次の往生を
えんとおもはば古をそねむ

けり。三心の奥も、また奥せうこと勿論なり。

同集

又いはく、もし念仏申す人、十人も百人も千人も、一人も暗く絶えずして往生せざることもあるべし。一人決定して念仏往生せんと思ふ。

同集

又いはく、自身の罪悪をかへりみて往生を不定に思ふ人おほかるやうにて、さてそのうへ百人千人ともかぞへがたきほどに、往生をとげんことは、本願の

平ひろく不思議なり。通理をもて人を惑さじと念仏往生の義をもうくるところ、十人

今ほやく本願の義をもて人をまどはすことなかれ。深意の方も検校別当として往生

生ぜん事、十人ともに法無碍光仏往生いうに

せずといふことなし。智慧

仏往生のあやぶまれんこと多しといへども、

もともなるべしとおぼえ候。

ともうしなどうのたまえる事也 同集

又いわく本願の念仏ひとえに他力をたのみて娑婆の縁をいとい極楽の往生をねがう人は極楽へ遍地すべしとすすめ一切善悪の凡夫を摂取して捨てたまわざるが故に念仏を遍ねく一切衆生に勧めたまえる事也 同集

又いわく念仏を信ずる人は上は諸仏の護念したまうところ下は一切善悪の凡夫を捨てたまわざるが故に念仏を信ずる人は十方の諸仏ことごとく来りて手を授けたまうなどのたまえる事也 同集

又いわく往生不定の人なり 同集

又いわく法然道理といい事おおかりけれどもこれにのみ心をとどめて菓子なき中にもまたおおかりけれども法

不道理也於弥陀の本願の名号を
衆悪の衆生を
今一向り念仏して中せん仏の来迎
道理
又いそく現世
悦ん
なみ
とも

籠居して中年已後、永倉住の三六会佛の
助業也。しかるに自身安穏にして
会佛往生をもんぜざるは、仰ぎもらふ会
佛の助業也。三途一返のつとめ事をするを
なげきそしりもれうなそしりて
ゆて往生極大事をけして会佛
中々人分をいふもくそくの事をく
ゆへ会佛の助業となりてそして

另を貪求するは三恩通の業として極楽
往生の会佛中々人分を自身を貪求
するは往生の助業となりて也万事く
わしくは同集

沙弥道通うりていうく故上人おせて
いわく往生の要ありや会佛第一の学問也
とへば答て一会佛往生を信ぜん人往生
当机学をして
宗要集に
そうり

御歌（ミウタ）

阿彌陀佛（アミダフ）と　となふるこゑの　いつかしも
なみだの雨と　ふりかはるらん

なき人の　ゆくへの雲を　ながめつゝ
もゝとせまでも　ふりにけるかな

わすれじと　おもふこゝろの　ふかければ
いけるにもまた　しぬるにもまた

いけるうち　人のこゝろに　ふかくのみ
きざみおきてん　名をぞとゞめん

もゝとせを　へだてゝもまた　あふことを
ちぎりおきてし　なかぞたのもし

ちぎりしも　その名ばかりに　なりはてゝ
淨土（ジヤウド）の荘嚴（シヤウゴン）　見るぞうれしき

志（こゝろざし）の　ふかきをしるし　ありがほに
阿彌陀佛と　十ぺんとなへ

黒谷上人語燈録巻第十五

